

## 在日韓国人スパイ捏造事件の傷跡——韓国内関連者の苦難を記憶する

開催報告

1970年代から80年代にかけて韓国では在日韓国人が「北のスパイ」にでっち上げられる事件が多数発生し、無実の人びとが韓国の獄中に捕らわれた。1977年に故郷済州島の人びとを巻き込んで「スパイ網」を形成し、「北の指令」を受けて反政府活動を働いたとして拘束され、いったんは韓国の大法院（最高裁）で死刑判決が確定した在日韓国人カン・ウギユ（姜宇奎）さんもその一人である。カン・ウギユさんは1982年に死刑から無期懲役に減刑され、1988年12月にやっと釈放されて翌年に日本の家族の元に戻ることができた。カン・ウギユさんがあしかけ12年の苦難の歳月を経て家族の元に戻ることができたのは、韓国の民主化とともに日本での粘り強い救援運動があったからである。

死刑判決が確定した在日韓国人政治犯は1970年代だけで5人にのぼり、そのうちの一人がカン・ウギユさんだった。カン・ウギユさんは逮捕当時、すでに60歳。日本の植民地時代を経験した世代であり、片足を失って義足を使って生活していた。喫茶店などを経営する実業家で、老後は故郷の済州島で過ごそうと準備をしていた矢先のことであった。事件当時、日本では1976年に「在日韓国人『政治犯』を支援する会全国会議」が結成され、韓国で逮捕され、身に覚えのない「スパイ」に仕立て上げられた人びとの人権を守ろうとする声が高まっていた。日本の国会でも在日韓国人政治犯事件は取り上げられ、東京でカン・ウギユさんの救う会も結成されて、無実の人びとを殺すなという声が全国で広がっていく。

カン・ウギユさんは家族の元に戻ることができたが、その事件に関連して拘束された韓国内居住の人びとは第一審で2名の無期懲役をはじめ重刑判決を宣告された。そのうちの一人、キム・チュベク（金秋白）さんは第一審で懲役7年、第二審で懲役3年を宣告されて、そのまま刑が確定した。この人こそ、今回翻訳出版を記念して公開講演会を持つきっかけとなった原著の著者、キム・ホジョン（金祐廷）さんの父親なのであった。

キム・ホジョンさんは、20代になって真相を知るまではずっと、事件のことを知らず、お父さんは病院で亡くなったとだけ知らされていた。韓国内の拘束者は反共が権威となっている韓国社会で「アカ」として冷遇され、筆舌に尽くしがたい苦痛をなめた。取り調べの過程で過酷な拷問が加えられたことは言うまでもない。それによって虚偽の自白が捏造されたのである。子どもには知らせない方がいいと思ったのも、理由のあることだった。しかし、キム・ホジョンさんは納得がいかず、亡くなった父の真実を知りたい一心で関係者を訪ね、カン・ウギユさんの事件の国内での人権侵害状況を掘り起こしていった。そうした過程で、今回の講演者である立教大学兼任講師のリ・リョンギョン（李昡京）さんと会ったのである。こうした紆余曲折を経てカン・ウギユさんと事件の関係者・家族は2016年の再審無罪を勝ち取った。

本書『在日韓国人スパイ捏造事件——11人の再審無罪への道程』（2023、明石書店）は、事件を記録した貴重な本である。5月11日の午後6時から立教大学池袋キャンパス

8号館 8303 教室で行なわれた公開講演会では、リ・リョンギョンさんが日本にいるカン・ウギュさんのご家族と、韓国から訪ねてきたキム・ホジョンさんとを引き合わせる



仲介役になり、韓国で出版された本を訳すことになった経緯も含め具体的にお話しされた。原著者のキム・ホジョンさんも韓国から参加してくださり、お話しくださった。また、カン・ウギュさんの娘さんのカン・グッキ(姜菊姫)さんらご家族も参加してくださった。約70人の参加者があり、在日韓国人政治犯事件の過酷さ、無念さを今一度胸に刻む機会になったのではないかと思う。

左がキム・ホジョンさん、右がリ・リョンギョンさん

在日韓国人政治犯に限らず韓国でのでっち上げスパイ事件は少なくないが、その記録は近年ようやく出版されつつある。韓国ではハンギョレ新聞の記者、東京特派員を務めたキム・ヒョスン(金孝淳)さんが書いた『祖国が捨てた人びと—在日韓国人留学生スパイ事件の記録』(2018、明石書店、石坂浩一監訳)がその先駆けで、その後もいくつかの本が出版されている。

日本でも、元在日韓国人政治犯のイ・チョル(李哲)さんやカン・ジョンホン(康宗憲)さんが体験記を出版された。また、今年2023年2月6日から10日の『朝日新聞』夕刊に5回にわたって連載された記事「独裁が奪った青春」では、在日韓国人政治犯の名誉回復の活動が紹介された。

さらに『週刊金曜日』でも1422号(2023. 4. 28)から5回にわたって、在日韓国人政治犯の歴史について紹介された。このような紹介が続いたが、多くの人びとを苦難に追いやった在日韓国人政治犯事件の研究はまだ深められているとはいえない。今後の課題に他ならない。

そして、何より『在日韓国人スパイ捏造事件—11人の再審無罪への道程』をご一読いただきたいと思う。在日韓国人政治犯事件が人の命と暮らしを踏みにじってしまった歴史を忘れないために、その事実はしっかりと記録されなければならないのである。

追記：『朝日新聞』2023年7月7日朝刊「リレーおびにおん」欄にカン・グッキさんのインタビューが掲載された。



運営委員 石坂浩一